箒川

ほうきがわ

水上勉

新潮社

箒川

ほうきがわ

水上勉

箒川

昭和六十一年一月十五日発行
昭和六十一年三月二十日二刷

著　者　水上勉

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
振替東京四―八〇八

印刷　二光印刷株式会社
製本　大口製本株式会社
定価　一二〇〇円

© Tsutomu Minakami　1986　Printed in Japan
ISBN4-10-321118-0　C0093

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

簿川／目次

箒川　七
石屋の音　三
つや　四九
紅守　六九
フレスノの空　九一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

うらにしが吹く　一二五
*
蛇の話　一四一
馬たちの行方　一五七
*
夢閨　一八三

装画・渡辺　淳

箒

川

箒

川

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

1

私は二十一歳の時、斎藤琴江に出会った。

琴江は、私より五つ上だったが、二つ三つしかちがわないぐらいに若く見えた。背丈は高く痩せていて肩がまるいので、歩く背姿はちょっと猫背になった。眉がうすく鼻梁のひくい造りは、美人とはいえないが、おでこがひろいので、聡明な感じだった。

私たちが二階（うえ）と階下（した）に住んだアパートは、東中野と大久保のあいだの、省線に沿うた柏木五丁目である。あのあたり、電車は高みを走っているので、線路に接近したアパートの南側窓からは、走る電車のよごれた腹が見えた。

琴江の部屋は、私の住む二階の真下で同じ六畳だった。鉄板の裏階段は琴江の部屋の窓すれ

すれなので、夏など窓があいていると琴江の部屋がのぞけた。今日のように煖冷房設備のない戦争下のことゆえ、真夏は窓をあけるしか涼をとれなかった。琴江は下一枚が不透明ガラスの窓障子を、卵いろのカーテンでさえぎっていたが、風がふくとめくれて部屋が見えるのである。女ひとり暮しの部屋を、あからさまにのぞくのはうしろめたかった。だが気になることは確かで、それに鉄階段の手すりが古く赤錆びていたため、降りる時は足もとへ眼がゆく。琴江の部屋の窓障子が閉まっていても、カーテン上部のたるみから、透明ガラスごしに部屋の一部が見える。琴江が部屋のあちこちを歩いたり、時には食事しているけはいもよくわかった。

間取りは私のところと同じだから、入口のガス台のある水屋は左手であるし、戸のない敷居をまたいで部屋へ入ると、東と南に窓があり、東側の窓下にだけ袋戸棚がある。私の部屋とちがっている点は、壁ぎわに桐タンスがひとさお、それに赤いちりめん布をかけた鏡台、さらに違い棚のある茶ダンスがあることだった。それらの調度品は、六畳の間借り人にしては多い方で、ひとり暮しの過去に秘密めいたものを感じさせた。

私は上京してすぐここへ越したので、昭和十五年の秋末だったことをよくおぼえている。先から住んでいた琴江は、胡散くさい田舎者が越してきて、表口をめったにつかわず、裏階段を出入りするのに気をとがらせている様子だった。だが、裏口に近い二階の他の住人たちも、たいがい階段をつかったのだ。その方が駅へゆくのに便利だった。

琴江は四時ごろにアパートを出て、夜ふけに帰った。時には明け方近く、大きな音をたててへたりこむようにすわるけはいがつたわってきた。水商売らしいこともそれでわかったが、夜おそい物音は私に好奇心をつのらせたし、親しみをもたせた。

飯田橋の農林新聞につとめる私は、ふだんは朝九時に出たので、この時刻は琴江はまだ窓もカーテンもしめていた。たまに出社を怠って日がな一日部屋にいる時など、窓から何げなく眼下の露地を見やっていると、四時に出てゆく琴江の長身のたばね髪の頭と、白い襟首がみえた。琴江はしょっちゅう着物を換えた。小紋の菊柄の、こまかい赤と黄が裾にちらばった袷に、濃臙脂(えんじ)の襟巻をしてゆく姿がいまもあざやかである。襦袢襟をすこしきつめにあわせた着こなしもよく似あった。

琴江とはなすようになったのは、越してまもない夜ふけに、社の仲間と呑んで駅で別れ、日本閣うらから神田川にかかった橋をわたってきて、先の電車で降りた琴江に追いついた時である。私の方から声かけて、どこにつとめているのかときくと、新宿の処女林だという。

「友達をつれてきてください。指名制度だから、わたしの名前をいってくだされば、卓子につけるし」

と琴江は背をまるめていった。私が三流新聞につとめ、出勤もルーズで、酒好きなことなど、誰からともなくきいているらしかった。琴江のそういう誘い方には同じアパートの住人だし、

といった気安さがこぼれていたように思う。

私が新宿処女林に二どか三ど行ったのはこの誘いがあったからで、途中でやめたのは金がつづかなかったからである。安給料の私にはとても入りびたれない店だった。その三どぐらいしか行かなかった店の記憶だが、武蔵野館から、駅南口の方へ歩いて、すぐ左手だったかと思う。途中にある電気ブランを呑ませる神谷バアが私たちのゆきつけで、その隣りにあった処女林は、高級キャバレーだった。建物はそう大きくないが、右手階段から上りきった二階が店で、背もたれの高い椅子が、列車シートのようにならび、天井も壁も真っ赤な彩色だった。女給（ホステスとはいわなかった）が思い思いの自前衣裳で三十人もいたろうか。蝶ネクタイ、白背広のボーイが、せわしく往きかう女給さんに、何子さん何番テーブルご指名、という声と女給の返事と客の叫声が渦まいていた。私がひとりでゆくと、琴江は、すぐ卓子にきて、何やかやはなした。アパートでは派手な方でも、店では地味に見える琴江を私はいっそう好ましく思った。

金がないから来たくてもそうそう来られない、と私は琴江にいった。琴江はだまってわらっていた。それからはアパートの鉄階段を上り下りする時に、私だと琴江は窓をあけたままにして話す日があった。私は処女林でよりも、ふだん着の素顔でいる琴江が、時には、シュミーズきりで、痩身にしては、肉のある白い腕をのばして、窓へ干し物などしているのを見るのが好きだった。屋台かおでん屋の安酒で呑むのが精一杯だった私には、高級な店は気怖じがしたし、

大ぜいの女給にもまれて泳いでいる琴江に、淋しいようなものを感じたのは、琴江が私より五つ上だとわかったせいだ。二、三どの処女林ゆきで、何を話したかわすれたが、おたがいに田舎出だったゆえ、里の話をしたのをおぼえている。私が福井県の若狭だというと、琴江は、

「わたしは那須の大田原」

といった。大田原ときいて、京都の禅宗寺の徒弟の通った中学で、同級だった渡辺という男が、大田原の近くの寺院の長男だったことを思いだし、その寺の名をいうと、

「長禅寺さんなら知ってるわ。野崎でしょう。わたしの生れたところだから、箒川の近くです。わたしは七つまで野崎にいて、大田原へうつったから……」

長禅寺という、琴江が七つまで育った町の寺を、共通に知っていたことで、ひとつ垣根がとれた。

「箒川は塩原温泉から流れてくる大きな川なのよ。わたしらの町には、広い白洲があって、木が生えてるわ……那珂川へそそぐのよね」

語尾に尻上りの訛りがあって、それは那須地方の特色らしかった。琴江はしかし、それぐらいのことしかいわず、農家の生れなのか、商家の生れなのかも教えず、七つまでいた野崎という町から大田原へうつったといっただけだった。箒川の水は流れが急なところがあり、水かさがいくら増しても、中の洲の木は生きているといった。

「あれ、ハンの木よね。つよいのよ、きっと」

関西に生れた私は稲架(いねか)けにもなる畦(あぜ)のハンの木は知っていたが、関東の北の田舎は馴染みうすかった。中学の同級生でもいなければ、大田原という町など、記憶から消えていて当然だったろう。だが、長禅寺の名をいったことから、どうということもないながら、多少の縁のようなものを感じて、地方出身の働き者の多いアパートで、時間のルーズな仲間意識もあったのだろう、処女林へ呑みにゆかなくても、琴江は私と顔があうと、二階(うえ)と階下(した)の警戒心のない態度で、窓をあけたままにしてほほえむのである。

琴江が、左足の膝小僧に、年じゅう繃帯をまいていることに気づいたのは、一年ぐらいたってからである。夏の夜ふけだった。鉄階段をしのび足であがったが、深夜のことでもあるので、窓をあけている琴江の部屋へ眼が走った。琴江はもう店からもどって着物をぬいだ直後らしく、赤襟の白襦袢の下に、朱の腰巻をまとっただけの姿で、部屋の中央にすわって、左膝をたてていた。右足をあぐらにかまえ、左足を延ばして膝に繃帯をまいているのだった。股のあいだへ腰巻の裾をたくりこみ、芝居で見る弁天小僧のようなすわり方だった。私は息をつめた。わるいとは思いつつも眼をすえた。と、琴江は外のけはいを感じたとみえて、左膝にいく巻もまいていた繃帯を途中でとめ、繃帯のはしをひきずったまま、両手をついて、いざるように窓辺へきて、鉄階段の方を見ずに窓をしめた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.